

<論文>

アンデス形成期早期の神殿建築の成立背景の考察

—モスキート平原の新知見から—

鶴見英成

(東京大学)

カルロス・モラレス

(ペルー国立サン・マルコス大学)

【要旨】

形成期早期に北部ペルー各地に大規模な神殿建築が成立した背景を、北部海岸ヘケテペケ谷中流域モスキート平原での発掘と年代測定の成果から考える。モスキートZ神殿のZ1基壇は、炉を持つ部屋を中央に載せ、そこに至る細い通路が複雑に配置された形態で、その年代は紀元前1850～前1650頃と見られる。平原内には他に3地点に神殿建築複合があり、成立時期に差がありつつもそれらは併存し、相互に視覚的に結びつくように配置されていた。特異な形態を持つモスキート平原の神殿群には、海岸部の宗教美術や山地に特徴的な建築プランなどが見てとれる。中央～北中央海岸に比べ、北部海岸の神殿遺跡は成立年代が遅い、事例が少ない、規模が少ない、形態が多様、といった傾向があるが、その背景が具体的になった。中央～北中央海岸での神殿の発祥から1000年近くのちに、山間部のルートを通じてこの地にさまざまなアイデアが持ち込まれ、神殿を擁する村落が成立したのである。今後は平原における農耕と関連づけた考察が必要である。

【キーワード】

ヘケテペケ谷中流域、モスキート平原、形成期早期、神殿、農耕

【目次】

1. はじめに：本稿の目的
 2. ペルー海岸部の形成期早期の神殿遺跡の特徴
 3. ヘケテペケ谷中流域テンブラデーラ地域の先行研究
 4. モスキート平原における考古学調査
 5. モスキート平原の神殿建築群の発掘
 6. 論考：モスキート平原の神殿群の成立をめぐって
-

1. はじめに：本稿の目的

アンデス文明の形成期（紀元前3000～前50年頃）に、今日のペルーの各地に数々の大規模な公共建築が成立した（図1）。それはいかなる背景のもとで起こった現象なのかを、実証的に説明することが筆者らの関心である。この関心に即して複数の調査計画を進行させているが、その一つが北部ペルーのヘケテペケ（Jequetepeque）谷中流域、テンブラデーラ（Tembladera）地域における形成期遺跡群の考古学調査である。

日本のアンデス研究者は形成期の祭祀建築を、「人びとが集うような公共建造物」にまで意味を拡大させた上で、「神殿」という語で呼ぶ〔関 2017a: 9〕。反復的に建築を更新する儀礼があったために、社会の大規模化・複雑化が起こったという見方から、彼らは神殿建築の登場をもって文明形成期の始まりと見なし、形成期早期（紀元前3000-1800年）に始まる形成期編年を提唱した〔加藤・関編 1998〕。従来は土器の導入時期（紀元前1800年頃）が文明形成の始まりと見なされ、それに先だって神殿が建造されていた時期は、古期末期もしくは先土器期末期と呼ばれていた。それを形成期の始まりとして再定義しようとする考えだが、それに近い意見は国際的にも広まりつつある〔e.g. Shady 2014〕。既存の神殿を改変する場合も、既存の神殿を眺望しながらその近隣に新造する場合も、いずれにせよ神殿とは、既存の神殿を意識しながら設計・施工される建築である。ならば周囲に既存の神殿がない「最初の神殿」が、なぜその場所に建ったのかという問題にとり組むことで、神殿を成立させ、維持させ、改変させ、放棄させる背景が見えてくるであろう。この問いは究極的には「中央アンデス最古の神殿の特定」という困難な課題となる。しかしその端緒として、特定地域に焦点を絞り、なるべく古い時代へとさかのぼってデータを収集していくことは、実現可能で堅実な研究計画である。本稿においてはとくにモスキート平原（Pampa de Mosquito）にて発見された形成期早期の神殿建築群に焦点をあて、測量・発掘・年代測定の成果にもとづいて論考する。具体的な目的は、テンブラデーラ地域に神殿が成立した背景について、第1に地域レベルで、第2に他地域のデータを参照して地域間レベルで考察することである。

なお本稿では日本のアンデス考古学の術語にならない、祭祀をはじめとする公共的な活動の場の全体を「神殿」と呼ぶが、考古学データへ言及する際には、基壇・広場・部屋など個々の遺構を「神殿建築」、それらが集合して「神殿」として機能する全体を「神殿建築複合」と呼ぶことにする〔cf. 鶴見 2017a〕。

2. ペルー海岸部の形成期早期の神殿遺跡の特徴

北部ペルーでは海岸部でも山地でも、多くの形成期早期の大規模建築が発見されているが、現時点では海岸部の諸河谷、とくにペルーの中央海岸から北中央海岸にかけてのデータが厚い。中央～北中央海岸と、ヘケテペケ谷の属する北部海岸を対比させる形で、形成期早期の遺跡群を概観する。

中央海岸の北辺、ワウラ（Huaura）からフォルタレサ（Fortaleza）の諸河谷にかけて、多数の神殿遺跡が稠密に分布することが確認されている〔Shady et al. 2003; Shady 2008; Vega-Centeno 2005; Ruiz et al. 2007〕。地域名をとってNCC伝統（North Central Coast Tradition）とも呼ばれるこれらの諸遺跡は〔Vega-Centeno 2005〕、円形半地下式広場などの建築形態を共有しており、沿岸部から内陸部まで分布し、中にはカラル（Caral）遺跡のようにとくに巨大な神殿建築複合の集合も知られ、紀元前三千年紀前半の年代を示すものが多い〔Shady et al. 2001; Haas et al. 2004〕。北中央海岸ではカスマ（Casma）谷下流域のセチン・バホ（Sechín Bajo）遺跡にて、円形半地下式広場などを供えた神殿建築複合が、紀元前四千年紀後半というきわめて古い年代を示した〔Bischof 2011; Fuchs et al. 2011〕。その古さは突出しているが、近年ではフォルタレサ谷のワリカンガ（Huaricanga）遺跡でも、もっと



図1 本稿にて言及する北部ペルーの公共建築遺跡

も古い神殿建築が紀元前四千年紀後半の年代を示しており [Piscitelli 2014]、これらの地域における神殿成立時期の早さは今後確かなものになっていくのかもしれない。

それらの事例と比べると、北部海岸には形成期早期の建築がそもそも少なく、また大規模な公共建築であっても、祭祀性よりも居住空間としての機能が優先している事例が見られる。北部海岸の南辺のチャオ (Chao) 谷は、下流域のサリーナス・デ・チャオ (Salinas de Chao) 遺跡 [Alva 1986b] や、内陸部のセロ・カブラ (Cerro Cabra) 遺跡 [Cárdenas 1998] など、円形半地下式広場を持つ整然とした基壇複合が見られ、NCC 伝統に連なる神殿遺跡の分布域に含めうる。しかしより北の諸河谷の公共建築は、ビルー (Virú) 谷のワカ・ネグラ (Huaca Negra) 遺跡のように [Willey 1953:38-42] より居住的な性格が強い。モチェ (Moche) 谷のアルト・サラベリ (Alto Salaverry) 遺跡は小規模な円形半地下式広場を持つが、遺跡全体としては村落と見なされている [cf. Burger 1992; Billman 1996; Pozorski 1976; Vega-Centeno 2005]。チカマ (Chicama) 谷のワカ・プリエタ (Huaca Prieta) 遺跡は、紀元前六千年紀に沿岸部に成立した不定型なマウンドが拡張を重ね、紀元前 3300 年頃に北中央海岸など外部の諸集団と交流し、頂上部に円形半地下式広場を戴く祭祀建築になったとされる [Dillehay ed. 2017]。すなわち局地的に発展した公共建築である。さらにその北側にあるのが本稿で取り上げるヘケテペケ谷であるが、形成期早期の神殿が認められないと長らく論じられていた [cf. Castillo 2009]。その北のサーニャ (Zaña) 谷では下流～中流域において石期・古期の遺跡が綿密に踏査され、公共的な性格の「ナンチョク霊園 (Cementerio de Nanchoque)」

遺跡など不定型なマウンドが紀元前六千年紀には成立したとされるが、形成期早期の年代に合致する公共的な遺跡は下流域のセロ・ギターラ (Cerro Guitarra) のみである [Dillehay ed. 2011]。居住址群と、自然地形を踏襲した不定型な広場を持つ遺跡で、それ以前からの地域的伝統のマウンドに近く、本稿で検討する神殿建築とは異質である。それより北方ではレケ (Reque) 谷に神殿建築複合ベンタロン (Ventarrón) 遺跡 [Alva 2013] が知られるが、外壁を支える控え壁など独自の特徴を持つ。これは中央～北中央海岸の神殿建築群とは別の伝統に属する、という意見が多い [Kaulicke 2011:393; Shady et al. 2009:8]。

これらの先行研究を総括すると、形成期早期の神殿遺跡が少ないこと、もしくは遺跡全体が小規模で、祭祀建築よりも居住空間が優先しているといった特徴は、中央～北中央海岸と対比した場合の、北部海岸全体の傾向だと考えられる。ヘケテペケ谷の下流域では古期の狩猟採集民が次第に定住性を高めていく過程が解明されているので [Dillehay ed. 2011]、古期末期＝形成期早期にこの谷が無人だったのではなく、神殿を築く背景が整っていなかった、というのが筆者らの考えである。その背景とは何かを考える上で、対象となる遺跡が少ないこの地域は「最初の神殿」を見いだしやすく、問題解決に適している。筆者らがその端緒をつかんだのがモスキート平原である。

3. ヘケテペケ谷中流域テンブラデーラ地域の先行研究

モスキート平原はヘケテペケ川中流域南岸、テンブラデーラ村の対岸に開けた平原で (図2)、行政区分上はカハマルカ (Cajamarca) 県コントゥマサ (Contumazá) 郡ヨナン＝テンブラデーラ (Yonán-Tembladera) 村に属し、同郡サンタ・カタリナ (Santa Catalina) 農業共同体の管理下に置かれている。筆者らは2009年よりこの平原を調査しているが、それ以前にテンブラデーラ村周辺にはさまざまな考古学研究的蓄積があった。

テンブラデーラ村の下流側に農業用水用のガジート・シエゴ (Gallito Ciego) 貯水池の建設が決まったことをうけ、1980年代前半に水没予定地、および新道建設などに伴い破壊される遺跡群の事前調査が実施された。ただし従来から車道の通っていた北岸が調査の中心となり、とくに形成期の神殿建築が多数分布するアマカス平原 (Pampa de Hamacas) にて多くの発掘が行われた [e.g. Ravines 1982, 1985; Tellenbach 1986]。ペルー文化庁の調査団は水没予定地一帯の遺構分布地図を作成したが、交通の便が悪く居住者も少ない南岸はごく一部しか含まれず、遺構の観察所見や文化期などの情報が不完全なままで出版されている [Ravines 1981]。

貯水池の完成後は考古学者に顧みられることなくなったテンブラデーラ地域であるが、1998・99年に加藤泰建が代表となり、坂井正人らが実施した広域踏査 [坂井ほか 2000] において、アマカス平原の遺跡群のいくつかは水没・破壊を免れたことが確認された。2003年に鶴見はラス・ワカス (Las Huacas) 遺跡の調査を開始したが、モラレスの参加した2004・2005年にはそれに加えて周辺の8遺跡を発掘し [Tsurumi 2017c]、土器の特徴、建築の形態、埋葬、地形、年代などを加味して、神殿遺跡間の編年的・機能的な関係を考察した [鶴見 2008, 2009; Tsurumi 2010, 2014a]。それによれば紀元前1500年頃、アマカス平原の西端の耕作地に隣接してアマカス期 (形成期前期、紀元前1500～前1250年頃) の神殿建築と居住域が成立した。やがて水害の回避や、祖先崇拜儀礼を可視化した景観の構築を目的として、西側の神殿に墳墓を添えて「閉鎖」し、数百メートル東側に新造した新たな神殿に「移転」する、という建築活動が繰り返された。アマカス期の終盤に成立したラス・ワカス神殿は、おそらく世襲制の神官たちがテンブラデーラ期 (形成期中期、紀元前1250～前800年頃) に祖先崇拜儀礼に注力し、権力の強化を図ったことにより、地域内で随一の巨大な神殿建築複合へと発展した [鶴見 2008, 2017a]。このような過程を経て、アマカス平原に多数の神殿遺跡が残ることとなったのである。

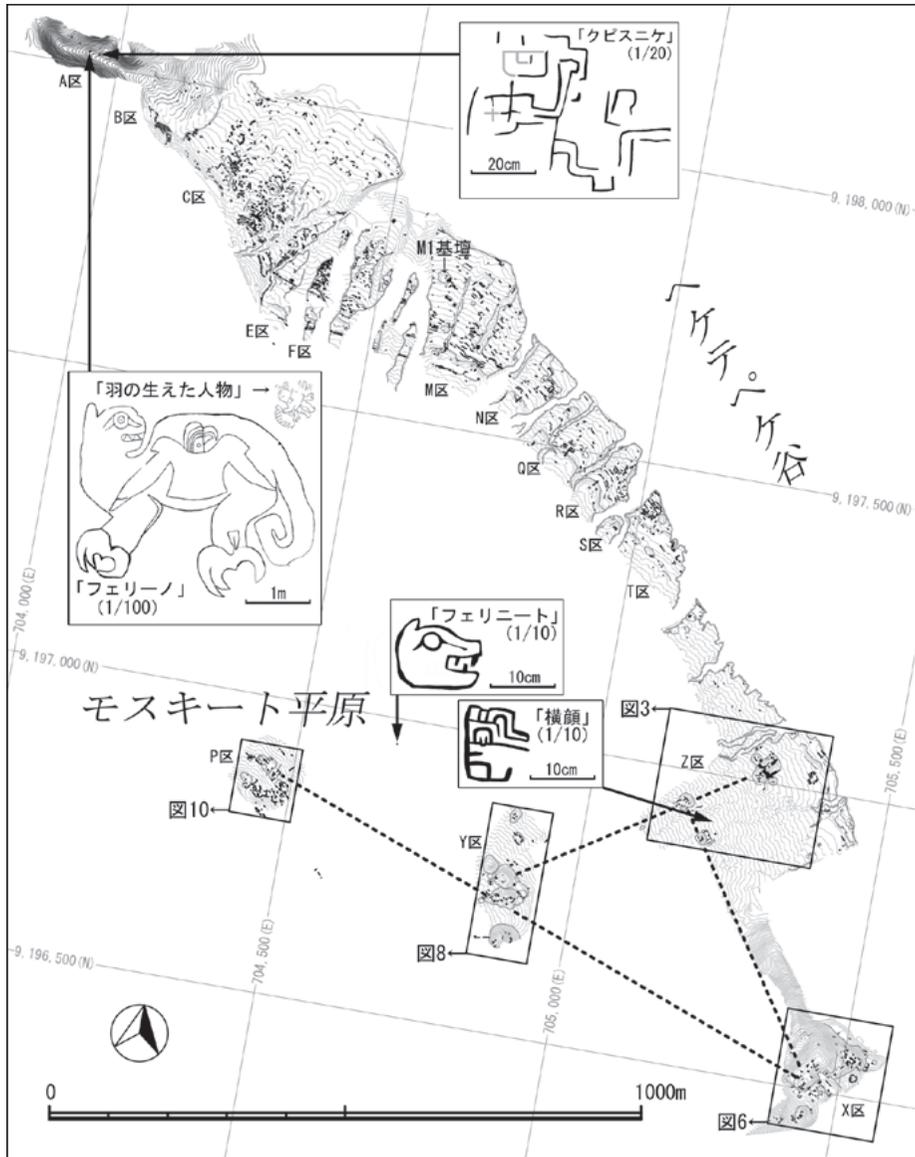


図2 モスキート平原の地形、遺構と主要な岩絵の分布

4. モスキート平原における考古学調査

4-1. モスキート平原の環境と先行研究

モスキート平原は南岸の山から北向きに開けた扇状地で、東西2カ所の扇頂を持つ。扇端は断崖を成して谷に面しており、崩落を繰り返すため扇状地全体は徐々に縮小しているが、現在は北西端から南東端まで約2.3kmの距離がある。山から下ってくるケブラダ（涸れ谷）によって多くの丘陵に分割されており、調査上の必要か

ら、丘陵ごとにアルファベットで区名を設定した(図2)。遺構が多く分布するのは扇端近くのB区からZ区までの丘陵で、それ以外に遺構の分布する範囲はA、P、Y、X区としてカバーされている。

橋や渡河用の吊り籠は4km以上上流にしかなく、モスキート平原に到達するには北岸から貯水池をボートで渡るか、やや上流寄りの河床を歩いて渡るしかない。現在は低木やサボテンがまばらに生えた乾燥地で、山からの散発的な鉄砲水で運ばれたと考えられる角礫が地表を広く覆っている。居住者はおらず、ロバなどの放牧以外の土地利用は見られない。貯水池建造前にも渡る人は少なく、先述の通り1980年代の考古学調査も実質的に手つかずであった。モスキート平原での形成期の考古学的痕跡に触れた先行研究は、形成期の墓地としての言及[Alva 1986a: Beilage]および盗掘されたとされる土器の紹介[Alva 1986a:76,152]、それとA・B区におけるペトログリフ(線刻岩絵)の報告である[Pimentel 1986]。

A区は平原北西端のB区に下る狭窄なケブラダであるが、Victor Pimentelはそれら両方をあわせ、ケブラダ・デル・フェリーノ(Quebrada del Felino)という岩絵遺跡として報告した。両区に点在する44点の自然岩に彫られた図像の中で、とくにA区の巨岩に施された「フェリーノ(ネコ科動物)」(図2)が遺跡名の由来である。セロ・セチン(Cerro Sechin)遺跡やプンクリ(Punkuri)遺跡など、北中央海岸の形成期早期の神殿壁画装飾と共通する表現で描かれているとして、美術様式の編年研究を専門とするHenning Bischofは「セチン様式」の事例として引用した[Bischof 1994]^(註1)。

4-2. 2004年の踏査と2009年の発掘

筆者らはラス・ワカス遺跡の発掘と平行して、モスキート平原を2004年に踏査している。そして「フェリーノ」の周辺に石造建築が複数分布すること、平原の扇端の丘陵上に角礫に覆われた不定型なマウンドが多数存在すること、とくに平原の南側のZ区やY区には大型のマウンド群があることを確認した[Tsurumi et al. 2005]。しかしいずれのマウンドにも、地方王国期のチムー文化(900~1450年頃)のものと考えられる、大型・厚手・粗製で赤褐色の土器片が少数伴うため、その時代の建築であると解釈した。マウンドの築造年代が先土器段階なのではという疑問が生じたのは、平原北西部にて以下のような発掘調査を実施した結果である。

2009年に筆者らはA・B・C区の発掘を計画したが、A区での主目的は「フェリーノ」至近に位置するA基壇の時期の解明であった。土留め壁が曲線を描くなど、アマカス平原の形成期建築とは異質な形状のA基壇は、わずかに内部に土器を含んでいた。また埋葬人骨に供えられた装身具が、形成期中期以降にヘケテペケ谷上流域に搬入されるようになったソーダライト[清水ほか2007]製であったことや、至近の岩に形成期中期の美術の特徴を持つペトログリフ「クピスニケ」や「羽の生えた人物」(図2)が彫られていることなどから、A基壇じたいは形成期中期に築造されたと結論づけた[Tsurumi and Morales 2012, 2015]。続いてB区の間山に石壁を設けたB1基壇と、C区の平地に位置するC1基壇を発掘し、土器が含まれないことを確認した[Tsurumi and Morales 2010]。いずれも基壇の内部に角礫が多量に含まれ、基壇の崩落の進行に伴って、それが地表に露出するということがわかった。そして同じく角礫に覆われた、Z区やY区のマウンドが形成期早期の大規模建築ではないかという仮説を立て、その検証を次の調査の課題にしたのである。

5. モスキート平原の神殿建築群の発掘

筆者らがこれまでに重点的に発掘してきた、Z区のモスキートZ神殿のZ1基壇についてまず記述し、次に小規模に発掘したモスキートX、Y、Pの各神殿建築複合のデータを提示する。

5-1. モスキートZ神殿の発掘

Z1基壇は北東-南西方向に約55mの長さを持ち、幅は最大30mほどで、北側の裾から頂上部までの高低差は約10mである(図3)。全体に多数の盗掘坑が残され、随所に石壁が露出している(図4)。北西側にZ2基壇、南東側にZ3基壇という小規模な基壇が接続している。また100mほど南西方に、それぞれZ4基壇、Z5基壇と命名した、直径約30mの小規模な基壇が認められる。これらの全体を「モスキートZ神殿」と呼ぶが、Z1基壇とZ4・Z5基壇の間は相互によく視認できるものの、他の神殿建築複合の場合と比べると距離が遠く、将来的には両者の間に機能的・編年的差異を見いだす可能性もある。なおZ1基壇の北東側には部屋状の石造建築や低い基壇などが分布するが、チム文化のものらしき土器片が多く見られるため、編年上の対応関係は未解明である。なおZ5基壇付近に2つのペトログリフを発見したが(図3)、その1つ「横顔」(図2)は、髪もしくは血流を後方になびかせた左向きの人物の横顔である。「への字」の口や非写実的な目の描写などが、「ブクリ様式」の一端としてBischofが挙げた、北中央海岸に出土例の多い「スチマン型石鉢(Suchiman-type stone mortar)」と共通する[Bischof2008: 134-136]。

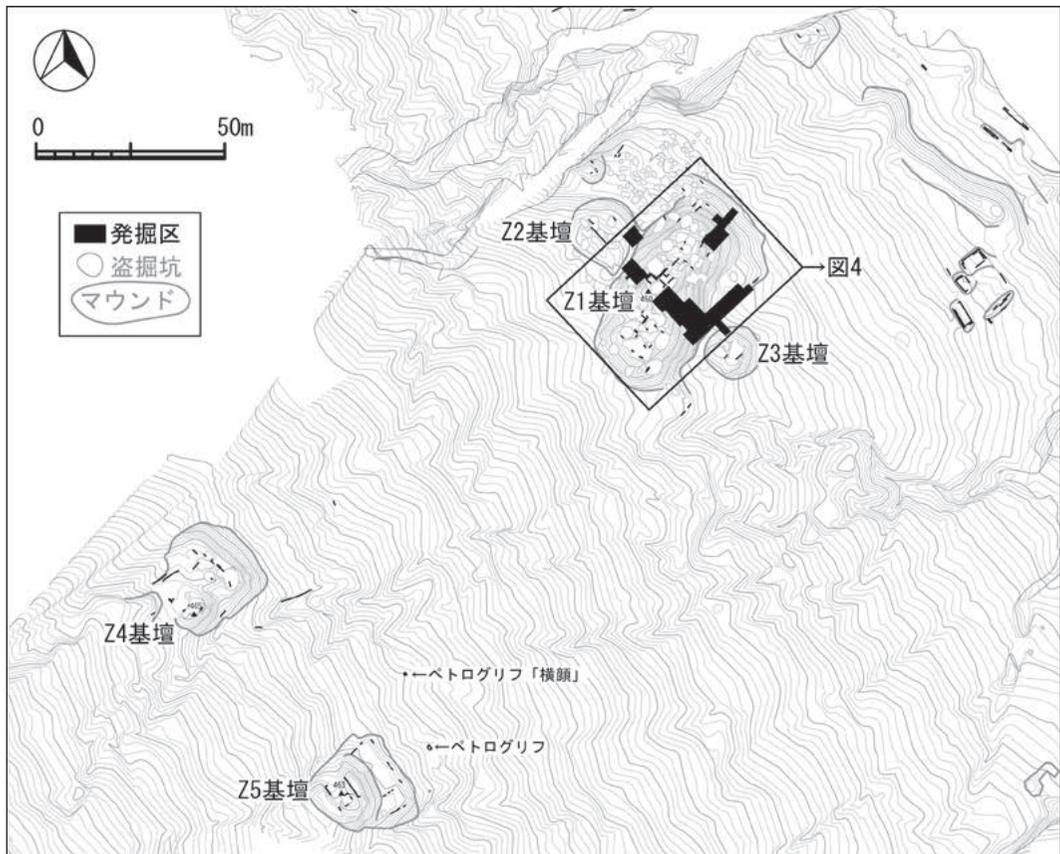


図3 モスキートZ神殿、全体図

5-1.1) 北面の発掘

2011年にZ1基壇の北面にてトレンチ発掘を実施し、土器が出土しないことを確認した。石壁は不整形の角礫

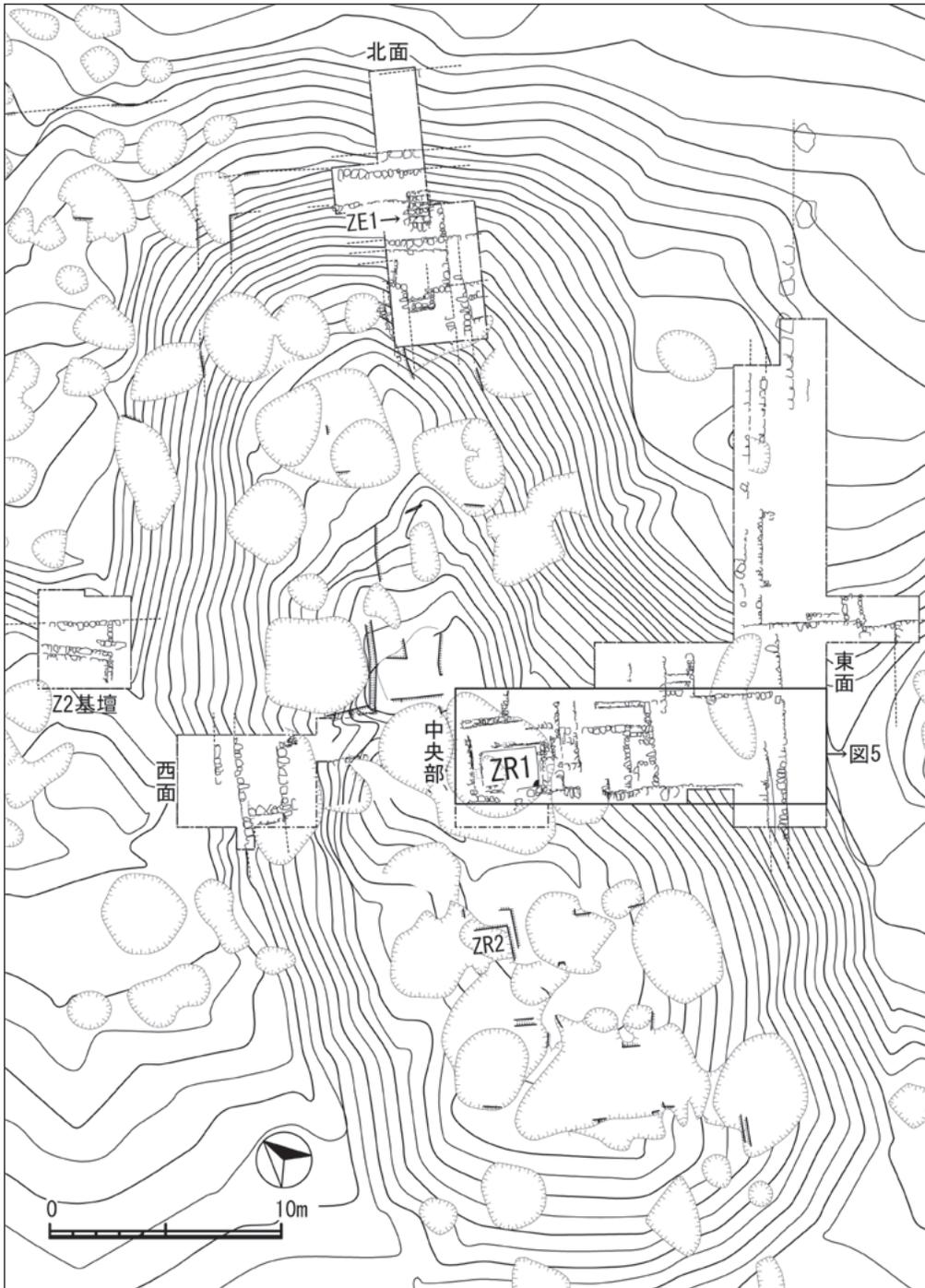


图4 Z1 基壇、全体图

で造られており、上塗りは見られなかった。基壇北面の全体を支える大きな土留め壁が3本認められ、少なくとも3時期にわたり大規模な築造があったことがわかる。建築プランの変遷を古い順に1期、2期、3期と整理し、さらに2期の基壇上で小規模な基壇が次々に継ぎ足され、複雑な構造物が造られていく過程をa~fの6段階に細分した。谷に向き合う基壇の北面をまず発掘したのは、形成期の基壇建築に一般的な、地表と頂上をまっすぐ結ぶ「主階段」の出土を想定したためである。しかし発掘の結果、それはこの地点にはなかったと判明した。1期において、高さ2mの基壇を登るために、幅1mの狭い通路状の階段ZE1が設けられていたが(図4)、マウンドの規模からして頂上はさらにその先だったと考えられた。また2期・3期の基壇の登り方は解明されなかった。基壇上部の入り組んだ壁群や小基壇群も含めて、全体的な建築プランが不明瞭なまま調査は終了した。なお床面や灰層に伴う炭化物を年代測定し(表1)^(註2)、ベイズ推定で層位的に新旧関係のある4点のモデル年代を算出した[Tsurumi and Morales 2016]。後段にてこれらを新たな測定結果とあわせて再度考察する。

資料名	C14年代	較正年代(1SD)	較正年代(2SD)	建築との対応
11MQZ-A-X8 (Beta-321451)	3460±30 BP	1875BC (20.4%) 1845BC 1815BC (9.2%) 1800BC 1780BC (29.5%) 1740BC 1715BC (9.0%) 1700BC	1880BC (95.4%) 1690BC	3期の床上の灰
11MQZ-A-X7 (Beta-321450)	3420±30 BP	1755BC (64.5%) 1680BC 1675BC (3.7%) 1665BC	1870BC (5.7%) 1845BC 1810BC (1.2%) 1805BC 1780BC (88.5%) 1635BC	3期の床下の灰
11MQZ-A-C5 (Beta-321446)	3440±30 BP	1860 (6.0%) 1850BC 1770 (62.2%) 1690BC	1880 (15.4%) 1840BC 1830 (8.9%) 1790BC 1785 (71.1%) 1665BC	2f期の床上
11MQZ-A-C7 (Beta-321447)	3470±30 BP	1875 (25.1%) 1840BC 1820 (15.8%) 1795BC 1780 (27.3%) 1745BC	1885 (87.5%) 1735BC 1715 (7.9%) 1695BC	2e期の床上の灰
11MQZ-A-C9 (Beta-322915)	3480±30 BP	1875 (26.6%) 1840BC 1820 (19.4%) 1795BC 1780 (22.2%) 1750BC	1890 (90.9%) 1735BC 1715 (4.5%) 1695BC	1期床上の灰

表1 Z1 基壇北面の炭化物のC14年代とSHCal13による較正年代

5-1.2) 中央部の発掘

2014年にトータルステーションでZ1基壇の外形を把握し、建築プランの再現と編年の確立を目的として再び発掘した。基壇中央部では、盗掘者の穿った深い縦坑を清掃して層位を観察したところ、坑の底にZR1という部屋を発見し、2015年に全面的に掘り出した。ZR1は長辺2.4m、短辺1.7mの長方形の部屋で、南西側の長辺に幅0.6mの入り口が、他の三辺の中央にニッチが設けられていた(図5)。上部は崩れていたが、壁の高さは床面から約2mと想定される。南東側の短辺である壁ZM80は、室外ではZM60の支える基壇に基部が埋め込まれていたと見られる。床面の南の角が扇形に深さ4cmほど掘りくぼめられ、そこに灰と炭が集中していたため、炉であったと判断した。室内の壁と床は白色の粘土質の上塗りが施され、炉の付近の壁面には煤が付着していた。

ZR1はZ1基壇の最深部ではなく、床を掘り抜いた盗掘坑の中にはさらに下層の床Pや石壁がのぞいていた。ZR1の室内はある時点で、土と角礫と灰によって埋められた。その中に長さ10cm前後の大型のチリイガイの貝殻と、石英片が多く含まれていたことから、部屋を埋める行為の祭祀性が示唆される。ZR1の上には床Cが貼られ、やがて床F、床D(貼り替えのD2を含む)など、数十cmずつ高さを増していき、それぞれの床に対応

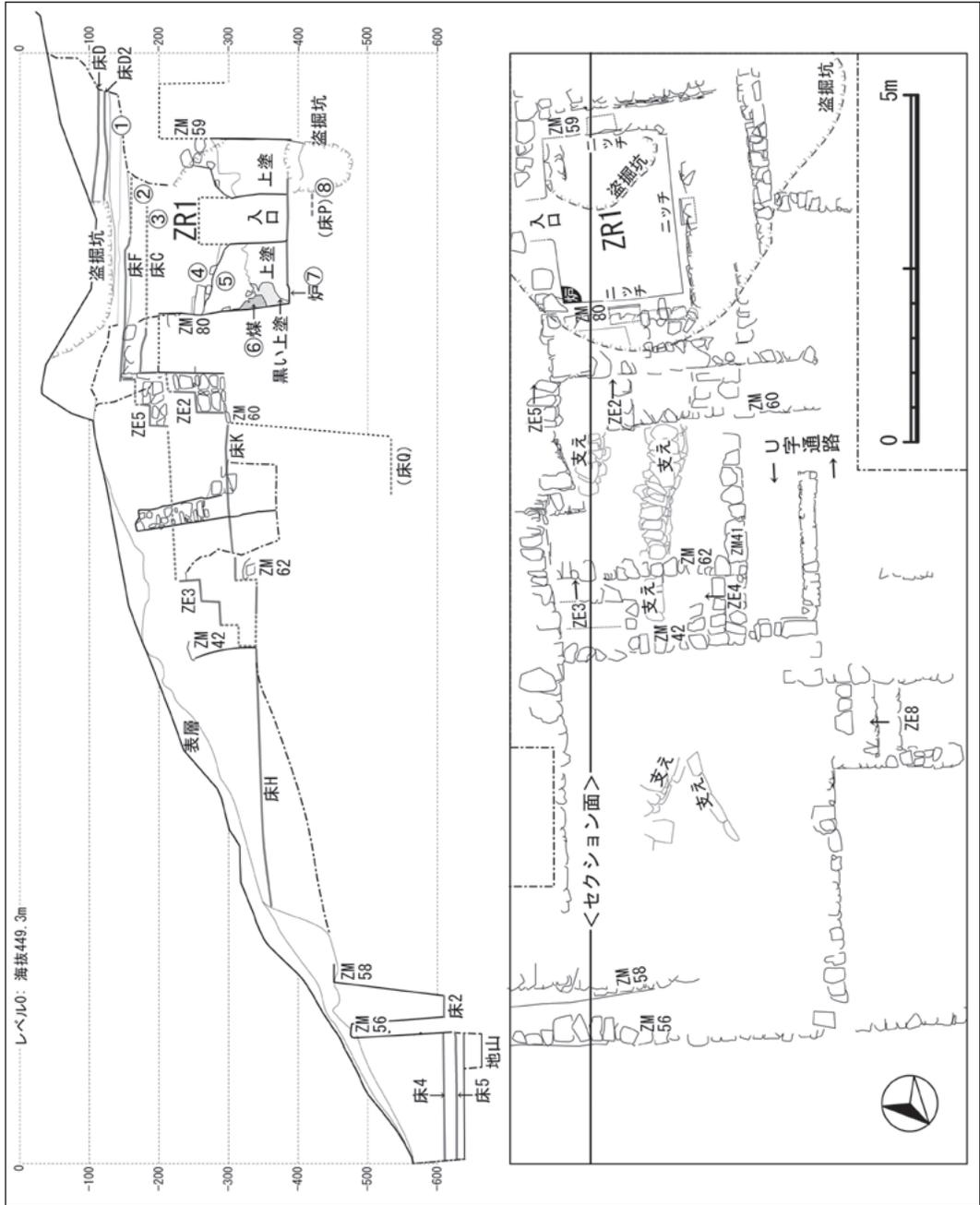


図5 Z1 基壇、中央部～東部発掘区の平面図と断面図

図5	資料名	C14年代	較正年代(1SD)	較正年代(2SD)	建築との対応
①	14MQZ-C27 (TKA-19058)	3445±28 BP	1745BC (68.2%) 1660BC	1870BC (3.0%) 1845BC 1775BC (92.4%) 1655BC	床Dの直下
②	14MQZ-C163 (TKA-19060)	3473±28 BP	1865BC (5.6%) 1850BC 1775BC (62.6%) 1685BC	1875BC (12.0%) 1840BC 1825BC (6.9%) 1795BC 1785BC (76.5%) 1640BC	床Fの直下
③	14MQZ-C182 (TKA-19062)	3441±27 BP	1740BC (26.5%) 1710BC 1700BC (41.7%) 1645BC	1865BC (1.7%) 1850BC 1775BC (93.7%) 1615BC	床Cの直下
④	15MQZ-C23 (TKA-19088)	3532±28 BP	1880BC (26.7%) 1835BC 1830BC (41.5%) 1765BC	1905BC (91.1%) 1735BC 1715BC (4.3%) 1695BC	ZR1の埋土内の灰(上)
⑤	15MQZ-C24 (TKA-19089)	3503±22 BP	1875BC (20.0%) 1840BC 1820BC (10.7%) 1800BC 1780BC (28.3%) 1740BC 1715BC (9.2%) 1695BC	1880BC (95.4%) 1690BC	ZR1の埋土内の灰(下)
⑥	15MQZ-C25 (TKA-19090)	3730±23 BP	2135BC (44.7%) 2070BC 2065BC (23.5%) 2030BC	2195BC (4.4%) 2170BC 2145BC (91.0%) 1965BC	ZR1壁面の煤
⑦	15MQZ-C21 (TKA-19087)	3585±29 BP	1940BC (43.3%) 1875BC 1845BC (14.4%) 1815BC 1800BC (10.4%) 1780BC	1970BC (95.4%) 1755BC	ZR1床上の炉
⑧	14MQZ-C173 (TKA-19061)	3483±28 BP	1870BC (11.2%) 1845BC 1775BC (57.0%) 1690BC	1880BC (95.4%) 1660BC	床Pの下

表2 Z1 基壇中央部の炭化物のC14年代とSHCal13による較正年代

する石造建築が周囲に設けられたと考えられる。以上の過程を解明すべく炭化物を採取して年代測定した(表2)。表2中の丸番号は、図5の断面図と対応して出土層位を示している(表3~5も同様に断面図と対応する)。後段にて、ベイズ推定で計算したモデル年代を示し、他の神殿の年代と相互に比較する。

5-1.3) 東面の発掘

北面になかった「主階段」を探して東面と西面を発掘したが、そもそもこの基壇には「主階段」がないという結論に至った。本稿ではとくに基壇全体の形状について重要な示唆が得られた東面について述べる(図5)。

試掘により部分的に検出した床Qは、ZR1を戴く基壇を支えていたと考えられるが、東面で出土したそれ以外の壁や床は、ZR1が埋められた後のものである。床Qを埋めて床Hと床Kを造る際、大型の石を壁状に並べた「支え」を随所に設け、流出を防ぎながら角礫主体の層を約2mも盛っている。この床H・床Kに対応する建築を観察することで、Z1基壇に「主階段」がない理由が判明した。U字通路や随所に設けられた階段に見るように、幅1mほどの順路が設定されており、方向転換しながら登り継いで頂上を目指す、迷路のような造りなのである^(註3)。これら東面の建築群の詳細については、現在準備中の年代測定の結果とともに改めて発表する。

5-1.4) Z1 基壇に関する総括：建築の特徴について

以上の調査を通じて、Z1基壇の建築上の特徴が大幅に解明された。石壁は直線的で、壁の角は直角であるが、全体の形状は単純な直方体などではない。長さ数m程度の小規模な基壇が立体的に組み合わせ、凹凸に富んだ立体物である。狭い通路と階段をたどって頂上を目指す造りは、迷路さながらである。部屋ZR1を支えていた時期のZ1基壇は、現状の姿よりかなり小規模であるが、ZR1がその中核的な祭祀施設として頂上部に載っていたと考えられる。またZR1より5m程南東側に、盗掘により露出したZR2という遺構がある(図4)。壁に上塗りがある点がZR1と似ているため、部屋であったと想定される。その床面は未確認であるが、おそらくZR1よりも3mほど高い。これはZR1が埋められた後、いずれかの時点で基壇の中核として設けられた部屋で

はないかと考えられる。Z1 基壇の中心軸上の、標高の高い地点に部屋を設けるという基本的な設計が、受け継がれていたのであろう。

なおマウンドの外観を特徴付ける角礫であるが、床 H・床 K の下のみならず、その上を埋める際にも大量に用いられていた。石の間がほとんど空隙になっている層も多く、発掘中に頻繁に石が崩れるため注意を要した。平原の全域に転がっている角礫を建材に使うことは理にかなっているが、「支え」の石列に見るように、築造時においても危険が伴ったであろう。あえて角礫を多用したものと仮定し、その理由について後段にて考察を試みる。

5-2. モスキート X、Y、P 神殿

川に面したモスキート Z 神殿以上に、平原の内奥に位置する 3 基の建築複合は到達が困難である (図 2)。そこで 2015 年にはそれらを測量したのち、土器の不在の確認と炭化物サンプル採取だけを目的として、小規模な発掘を実施することとどめた。その結果、いずれも形成期早期に対応する神殿建築だという見通しを得た。

5-2.1) モスキート X 神殿

モスキート平原東端に、平原から約 100m 隆起した丘陵がある。その山頂 (X 区) を覆う巨大な神殿建築複合をモスキート X 神殿と命名した (図 6)。X1 基壇と命名された中核的な基壇は、おおよその形としては、北東-南西方向に約 80m と長く、幅が約 50m の長方形としてとらえられる。しかし南東側の長辺は中央が大きくく

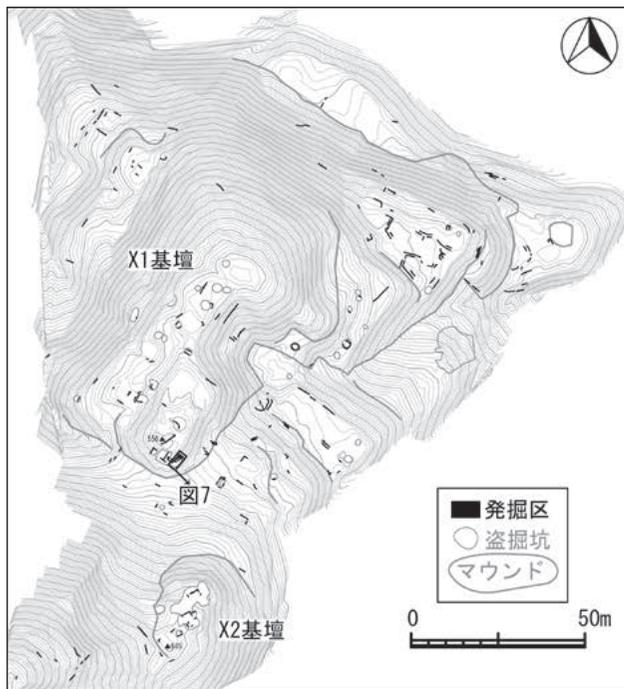


図6 モスキート X 神殿、全体図

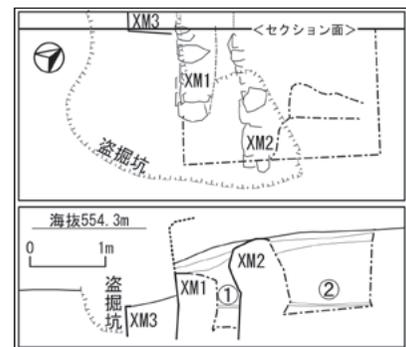


図7 X1 基壇、発掘区の平面図と断面図

図7	資料名	C14年代	較正年代(1SD)	較正年代(2SD)	建築との対応
①	15MQX-C2 (TKA-19081)	3517±22 BP	1875BC(25.6%) 1840BC 1820BC(17.2%) 1795BC 1780BC(25.4%) 1745BC	1885BC(88.4%) 1735BC 1715BC(7.0%) 1695BC	XM2築造の後
②	15MQX-C3 (TKA-19082)	3608±21 BP	1955BC(68.2%) 1880BC	2020BC(5.6%) 1990BC 1985BC(77.8%) 1870BC 1845BC(7.1%) 1810BC 1805BC(4.9%) 1775BC	XM2築造の前

表3 X1基壇の炭化物のC14年代とSHCal13による較正年代

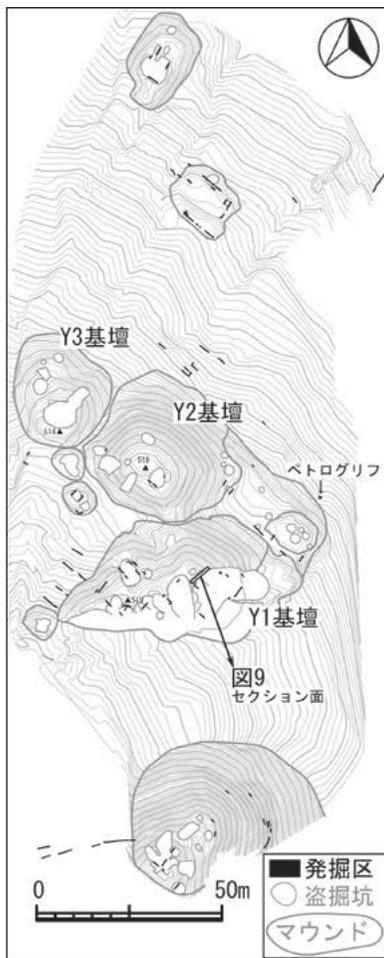


図8 モスケットY神殿、全体図

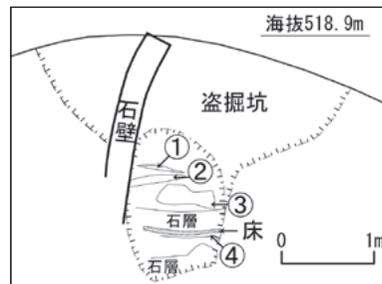


図9 Y1基壇、炭化物採取地点の断面図

ぼんでおり、先述の Z1 基壇同様にその輪郭は単純ではない。さらに多数の基壇がテラス状に周囲を取り囲み、平面的にも立体的にも凹凸に富んだ、きわめて複雑な構造物となっている。X1 基壇においては、基壇裾の立ち上がりから頂上の平坦部まで、北西側の長辺では標高差 15m、北東側の短辺では標高差 27m、ほぼ均等な勾配の急斜面となっており、本来の自然地形を大幅に改変したことがうかがわれる。X1 基壇の南方に約 20m の距離において小規模な X2 基壇が配置され、その西方に登る尾根に石壁群がテラス状に設けられている。

X1 基壇の南の角はひときわ高い小基壇となっているが、その南西面を支える壁 XM2 が、後に建設された XM1 によって埋められ、基壇全体が南側に約 0.8m 拡張された箇所が確認された。建築フェイズの異なるこれら 2 本の壁を含むように発掘区を設けた(図7)。基壇の内容は Z1 基壇同様に多量の角礫を含み、土器は出土しなかった。それぞれの壁の裏から採取した炭化物は表3のような年代を示した(表3)。

5-2.2) モスケット Y 神殿

Y 区のモスケット Y 神殿は、扇状地の東の扇頂をふさぐ位置にある、大小さまざまなマウンドの集合である(図2)。とくに大きな Y1 基壇は長径約 60m の楕円形、Y2 基壇は直径約 40m の円形を呈する(図8)。基壇

図9	資料名	C14年代	較正年代(1SD)	較正年代(2SD)	建築との対応
①	15MQY-C1 (TKA-19083)	3633±22 BP	2010BC (4. 0%) 2005BC 1975BC (64. 2%) 1900BC	2030BC (95. 4%) 1880BC	床上の灰 (上)
②	15MQY-C2 (TKA-19084)	3535±22 BP	1880BC (27. 2%) 1840BC 1830BC (41. 0%) 1770BC	1895BC (93. 2%) 1740BC 1710BC (2. 2%) 1700BC	床上の灰 (中)
③	15MQY-C3 (TKA-19085)	3527±31 BP	1880BC (24. 1%) 1840BC 1830BC (44. 1%) 1755BC	1905BC (88. 8%) 1730BC 1720BC (6. 6%) 1690BC	床上の灰 (下)
④	15MQY-C4 (TKA-19086)	3510±22 BP	1875BC (23. 0%) 1840BC 1820BC (14. 1%) 1795BC 1780BC (27. 0%) 1740BC 1710BC (4. 1%) 1700BC	1885BC (85. 0%) 1730BC 1720BC (10. 4%) 1695BC	床下の灰

表4 Y1基壇の炭化物のC14年代とSHCal13による較正年代

裾から頂上までの高低差はともに約11mと高く、斜面は急峻で、頂上の平坦部が狭い。やや規模の小さなY3基壇とあわせて寄り集まっており、その至近に小規模なマウンド群を伴っている。またY2基壇より30~50mほど北方に直径20m程の低い基壇が2基認められる。Y1基壇の約30m南方には自然の丘陵があるが、その頂上部にも石壁群が設けられている。発掘は実施しなかったが、形成期の土器の散布は認められず、内部から露出した角礫でマウンド全体が覆われていることから、他の神殿群と同じく形成期早期のものであろうと想定された。

Y1基壇の南側は大幅に破壊されており、現代において盗掘以外に土砂の採取地になったと見られる。その頂上付近に、北西方向に横坑が掘りこまれた盗掘坑があり(図8)、その断面に現れた4枚の灰層それぞれから炭化物を採取した(図9)。床下の1枚と、その床を埋める過程で盛られた3枚であり、床を境として別の建築フェイズに属する。それぞれ表4の様な年代を示した(表4)。

5-2.3) モスキートP神殿

モスキートP神殿は西の扇頂付近で2013年に発見された(図2)。ヘケテペケ谷からもっとも遠い基壇建築

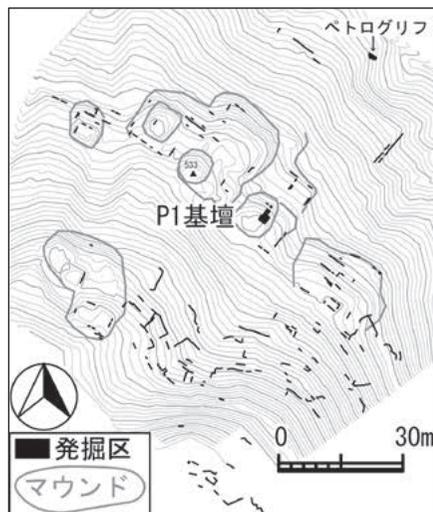


図10 モスキートP神殿、全体図

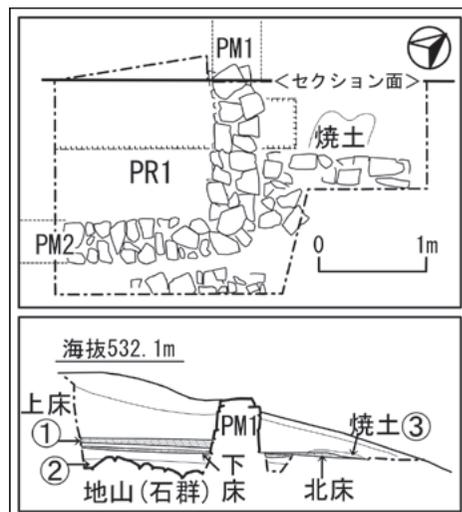


図11 P1基壇、発掘区の平面図と断面図

群であり、人目に付きにくいこともあってか盗掘の被害がほぼ見られない。基壇の裾から頂上の平坦部までの高低差は約3m、裾から最頂部までの高低差でも約5mと低く、他の神殿群に比べて扁平である。P1基壇と命名した中核的な基壇は外形がつかみづらいが、北西-南東方向に約45mの長さを持つ長方形に、水平・垂直方向にさまざまな小基壇を付け加えたような形態である(図10)。P1基壇の西側から南側にかけてやや小規模な基壇群が巡っており、さらに南側の自然の丘陵に多数の石壁が設けられている。P神殿から扇端のM区・N区にかけての範囲に、小さな岩に施したペトログリフを複数発見した。多くは時期不詳の幾何学文様だが、「フェリニート」(図2)は右向きのコネコ科動物の頭部で、「セチン様式」の「フェリーノ」を簡略化したものである。

P1基壇上の小基壇のひとつに小規模な発掘区を設けた(図11)。両面壁PM1とPM2が成す部屋状構造PR1の一角に該当する。PR1の角の外周は隅丸形を呈し、壁の両面とも粘土質の上塗りが認められた。床面は上下2枚が出土し、貼り替えが行われたことがわかる。他の神殿群よりは角礫を含む比率が少ないという印象を受けたが、とくに床の上の堆積はほぼ土から成る層が水平に堆積しており、床面を意図的に埋めて次の建築活動を行った可能性がある。炭化物はPR1の内部では上の床の表面と、地山直上の層から採取した。この2点は別の建築フェイズに属する資料と言える。またPR1の外側、北東側の床面に広がっていた焼土層からも1点採取した。以下がその測定結果である(表5)。

図11	資料名	C14年代	較正年代(1SD)	較正年代(2SD)	建築との対応
①	15MQP-C1 (TKA-19070)	3429±21 BP	1735BC(16.2%) 1715BC 1695BC(52.0%) 1640BC	1750BC(95.4%) 1615BC	PR1内の床直上
②	15MQP-C7 (TKA-19070)	3460±27 BP	1755BC(68.2%) 1660BC	1875BC(6.8%) 1845BC 1815BC(2.5%) 1800BC 1780BC(86.2%) 1625BC	PR1内の地山直上
③	15MQP-C6 (TKA-19071)	3329±21 BP	1610BC(68.2%) 1530BC	1635BC(95.4%) 1500BC	PR1外の床上焼土

表5 P1基壇の炭化物のC14年代とSHCal13による較正年代

6. 論考：モスキート平原の神殿群の成立をめぐる

6-1. 地域レベルでの考察

6-1.1) 編年的な関係

発掘の成果を総括すると調査前の仮説のとおり、Z1基壇のみならずX1、Y1、P1の各基壇も形成期早期に築造されたことがわかった。それぞれに隣接する他の基壇群も、他地域の遺跡に見られるような整然とした配置は見られないものの、距離が近く、角礫主体で築造されたという特徴を共有している。よってモスキートZ神殿のほか、X神殿、Y神殿、P神殿という神殿建築複合が併存したと考えられる。さらにそれぞれの年代測定結果を層位の新旧関係からバイズ推定し、年代を絞り込んだ結果を以下に示す(図12)^(註4)。

この計算結果を暫定的に50年刻みで解釈する。Z1基壇北面、1期から3期にかけての建築は、紀元前1750～1650年頃に造られたと想定される。中央部ではZR1が紀元前1800頃成立し、紀元前1750年頃埋められ、その上に床面を重ねながら紀元前1650年頃まで持続したと考えられる。中核部に埋もれたZR1の年代が古く、更新を繰り返した裾野である北面の年代が新しいのは必然的である。ZR1のさらに下に埋もれている床や壁の存在を考慮して、Z1基壇のごく小規模な原型が成立したのは、紀元前1850年頃と考える。

それ以外の神殿は、サンプル数が少ないため多くの仮定を差し挟まねばならない。X1基壇の炭化物は基壇が何度も拡張された末端部、Y1基壇の炭化物は表層近くから採取した資料であり、それぞれ内奥にはより古い年

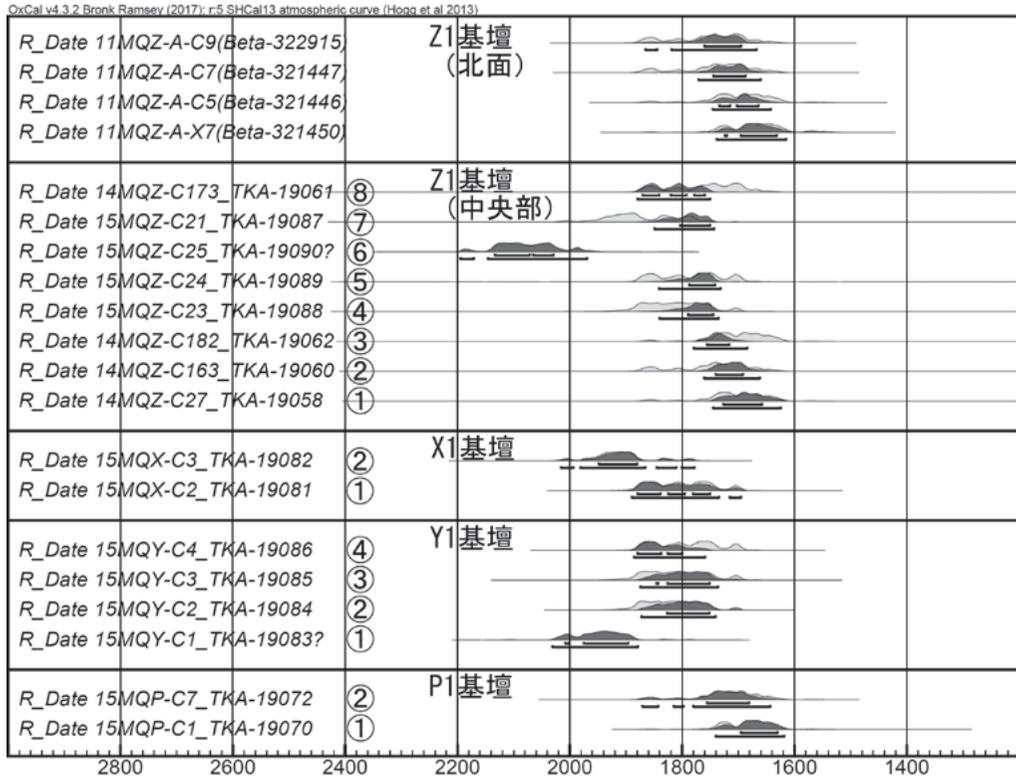


図12 新旧関係を用いたZ1、X1、Y1、P1基壇の年代測定結果のベイズ推定

代の建築が埋もれていると考えられる。X1基壇の年代が示すとおり、紀元前1900年頃には基壇が機能していたであろう。より新しい年代の資料はないが、複数の基壇から成る建築複合なので、いずれかの地点でより後の時点まで築造が続いていたことは考えられる。

明確に年代が新しいのがP神殿である。測定サンプルは中核的な基壇を地山直上まで掘り下げて採取した炭化物であり、未発掘の地点に大幅に古い建築が埋もれているとは考えにくい。神殿更新が周期的な活動であるか [Burger 2009: 28-29]、もしくは神殿に關係する人物の埋葬など重要な出来事に際して更新が行われるのであれば [関 2017b; 鶴見 2009]、創始からの期間が長い神殿建築ほど、更新が累積されて大規模な姿を残すと考えられる。P神殿は他に比べ明らかに小規模で、もっとも遅く建造されたと考えてよいであろう。

以上の結果から、暫定的であるが各神殿の機能した年代を提示する。4つの神殿は創始時点に差があった可能性があり、X神殿やY神殿は紀元前1900年以前、Z神殿は紀元前1850年頃、P神殿は1750年頃の成立であると考えられる。そして紀元前1650年頃、いずれも放棄されたのであろう。不確実性を含む結論ではあるが、中央～北中央海岸のとくに古い年代の神殿遺跡群に比べて、創始の年代がおおよそ1000年以上も新しい、ということは確実であり、重要な知見だと言える。

6-1.2) 機能的な関係

編年に加え、各神殿の立地から相互の関係を考察する。図2に示したとおり、神殿群は相互に数百m離れていても、1本の直線上に載るように配置されているようである。そのような線が、X1基壇→Y2基壇→P1基壇、

X1 基壇→Z5 基壇→Z4 基壇、Y2 基壇→Z4 基壇→Z1 基壇と、3 本成立しているように見える^(註5)。高所にある X1 基壇や Y2 基壇からは、線上の他の神殿建築を実際に眺望可能であり、偶然ではなく意図的な配置ではないかと考えられる。また P 神殿が時期的に後発であることは、既存の X 神殿→Y 神殿の線を延長し、新たに神殿を設けたという経緯が仮定できる。

先述の通り形成期前期～中期に対岸のアマカス平原では、旧い神殿をほぼ正面に眺望できるよう、新しい神殿が建設されるという活動が反復され、結果として神殿群が直線的に並ぶ景観が現出した。モスキートでは複数の神殿が更新を重ねつつ長期間併存し、またアマカス平原のように墳墓と組み合わせる祖先崇拝の意味を付与した証拠がない、などの相違点がある。4 つの神殿は完全に独立して機能したのではなく、視覚化された結びつきを保持し、全体として宗教的な意味合いを持っていたと考えられる。

6-2. 地域間レベルでの考察

北部海岸の神殿の創始年代は、古期初頭に始まる不定型な盛り土そのものが祭祀場として機能したというワカ・プリエタ遺跡を除けば、ベンタロン遺跡のように紀元前三千年紀前半が上限で [Alva 2013:77]、モスキート平原と同様に紀元前二千年紀後半から中葉にかけての年代を示す方が一般的である [Alva 1986b; Pozorski and Pozorski 1990]。ヘケテペケ谷のみならず、北部海岸の多くの谷において形成期早期の建築が少ないのは、そもそも登場時期が遅く、地域内に多数の神殿が併存するような状況にならなかったためではないか。また地域内で神殿の数が少ないために、建築形態が様式化せず独自性が妨げられなかったとも考えられよう。

モスキート平原の神殿群もまた、複雑な凹凸を呈する迷路状の建築プランが個性的である。ただし局地的な伝統を引き継いだワカ・プリエタやセロ・ギターラと違い、ヘケテペケ谷一帯にはモスキートの前身となる基壇建築が存在しない。ローカルな独自性はあれど、あくまでも外部からもたらされたアイデアが、モスキート平原に神殿群が成立した契機だと考えられる。もっとも明解なのが美術に関するアイデアである。モスキート平原では施文された工芸品や壁画などが出土していないため、参照しうるのは平原に散在するペトログリフのみであるが (図 2)、Z、Y、P 神殿はいずれも至近にペトログリフを伴っており (図 3、図 8、図 10)、建築と岩絵とは編年的・機能的に無関係ではなかったと筆者らは考えている。上述のとおり現時点までの知見では、北中央海岸の美術との共通性が顕著であり、また「ブンクリ様式」や「セチン様式」は形成期早期の後半に相当するとされるため [Bischof 2018, 2011]、モスキートの神殿群の比較的新しい年代とも矛盾しない。

建築の特徴に議論を戻そう。Z1 基壇で中核的な役割を果たしていた ZR1 という施設は、「コトシュ宗教伝統 (Kotosh Religious Tradition)」 [Burger and Salazar Burger 1980] の祭祀を行う、「祭祀用の炉を持つ小さな部屋」の例と言える。そのような部屋の建築様式を厳密にとらえようとする、その起源地がどこなのかという論争になるが [e.g. Haas and Creamer 2006: 767]、鶴見は「実は多くの遺跡において、それらは普遍的で無個性な設備なのではないか」 [鶴見・サラ 2016] と考えている。発掘成果から考えると、Z1 基壇は造り替えられて大規模になっていくが、頂上部につねに部屋が設けられていただろう、という見通しを提示した。もっぱら「祭祀用の炉を持つ小さな部屋」を支えるために大規模な基壇を築くのは、コトシュ (Kotosh) [Matsuzawa 1972] やラ・ガルガーダ (La Galgada) [Grieder et al. 1988] など山地の神殿遺跡の特徴だと言える。同じく基壇の頂上とは言え、カラル遺跡では端の方に副次的な要素として設置してあるように [Shady 2014]、中央～北中央海岸の神殿では「コトシュ宗教伝統」の儀礼が持つ意味合いが違ったのではないかと。直接の関係は容易に論じられないが、迷路のようなアクセスも、細い階段で基壇を登り継ぐという点においてコトシュ遺跡の基壇群と共通している。このようなことから、モスキートの建築の形態は海岸部よりもむしろ山地の要素が色濃いと言えるか

もしれない。このことは、中央アンデスの河谷中流域が南北方向の長距離ルートの経由点であり、とくに形成期早期には山地のサンティアゴ・デ・チューコ盆地を經由して、ヘケテペケ谷中流域とサンタ谷上流域の間に交流があったという、鶴見の仮説に深く関わっている [cf. 鶴見 2010, 2012, 2014b]。

地域間レベルの考察について総括しよう。中央～北中央海岸のどこかで「最古の神殿」が誕生し、それがおよそ 1000 年後に、モスキート平原に神殿が生まれる端緒となったのであろう。しかし先述のように北部海岸の神殿遺跡群は、中央～北中央海岸のものとは年代や性格が異なり、また形態の多様性に富むという傾向が見取れた。このことから、神殿にまつわるアイデアや技術は、単純に同心円状に周辺地域に伝播したのではないと推論できるが、本稿にて示したモスキート平原の新知見は、その推論に具体性を持たせることになった。モスキート平原の神殿群が、ビルー谷、モチェ谷、チカマ谷の海岸平野の公共建築群と大きく特徴が異なるのは、それらの地域を迂回して、山中から祭祀建築や宗教美術のアイデアが到達したからである。山地の神殿遺跡の詳細なプランや築造技術、編年などの解明が進むならば、山地を含むさまざまな地域において発展したアイデアが、後発であるモスキート平原の神殿群に引き継がれている、といった見方もできるようになるかもしれない。なお鶴見はこういった視点に立ち、コトシュ遺跡など山地の調査も並行して進めており、いずれ総合的にこの問題を論じる考えである。

6-3. 総括と今後の課題

本稿では新規に得られたモスキート平原の神殿群のデータから、神殿間の時期的・機能的関係を考察し、そして南方の遠隔地、主におそらく北中央海岸からの、山中のルートを通じた直接的なアイデアの到達が重要な契機であったことを指摘した。これは神殿の成立の背景を解明する上での小さな一歩であり、モスキート平原の神殿群の性質と、もたらされたアイデアの実相については今後も研究が必要である。その一環としてモスキート平原の調査は今後も継続するが、これまでと同じアプローチでは限界がある。礫を多量に含む不安定なマウンドを深く掘るのは危険であるが、基壇全体の建築プランが複雑すぎるため、表面的な発掘を重ねて壁や床を断片的に登録しても、神殿建築としての性格のさらなる解明は望めない。また X、Y、P の各神殿への道のりは困難で、大規模な発掘は見込めない。よって神殿建築じたいについて今後、データの大幅な拡充は難しい。目下筆者らが検討しているのは、むしろ神殿建築とは質の異なるデータの収集と解釈である。

鶴見は、アンデス文明の神殿の原点は農村の中核となるモニュメントであり、とくに形成期早期や前期の神殿遺跡に関しては、「神殿村落」としてその活動全体を考察すべきだと考えている [鶴見 2017a]。モスキート平原において今後掘り下げるのは生業の問題、とくに農耕をめぐる活動である。モスキート平原の扇端部の C 区から T 区にかけての発掘成果によれば、土器導入に先立って耕作が行われていたと考えられるのである [鶴見 2017b]。4 つの神殿間の機能的な関係にも、農耕と関連した視点が必要である。のちに形成期前期の社会がアマカス平原の耕作地に神殿を築いたように、農耕にまつわる儀礼が、原初的な宗教的イデオロギーと密接であったと考えられるためである。例えば、Y 神殿と P 神殿は扇状地の扇頂、つまり水源に位置していることに重要性があったのかもしれない。また他の地域から持ち込まれたのは神殿に関するアイデアだけではなく、農耕の実践じたいを促進する働きかけがあり、それが遊動性の高いヘケテペケ谷の居住者たちをモスキート平原にとどめたのだと考えられる。そのような包括的な視点から今後の研究方針を定めていく所存である。

なお、自然の状態においてモスキート平原の土層は角礫を多く含むが、耕地の土層は意図的に除去したためにその量が少なく、また除去した角礫を積み上げた不定形のマウンドが耕地の周囲に多数認められる。「支え」を設けて石を積み、上部に部屋などの構造物を載せたマウンドの事例もあり、それらもまた形成期早期に相当

するという見通しが、層位と年代測定から得られている。本稿で取り上げた神殿建築群は、直線的な土留め壁で全体の形状を整えてあるが、角礫を積み上げたモニュメントという点においては共通する。そこで筆者らは、耕作地を整備すると半自動的に発生する石のマウンドが、豊穡儀礼における象徴性を帯び、神殿を誕生させる一因となったのでは、と考えている。他の地域に敷衍できるかどうかはさらに検討を要するが、石を詰めた植物繊維のバッグ「シクラ (Shicra)」の使用は海岸部の形成期早期の神殿建築に広く認められ [e.g. Haas et al. 2004; Shady 2014]、また山地でも神殿の更新過程で石を多量に用いる事例は多い [e.g. Grieder 1988; Matsuzawa 1972]。運びやすさという利便性だけでなく、石を運んで積むという行為じたいの象徴性に着目することで、神殿の成立に新たな説明を与えられるかもしれない。

【謝辞】

2014・15年のモスキート平原での調査と資料分析は科学研究費補助金 25300036 と 17H04532 によって実施され、考古学者 Milton Lujan, César Sara、荘司一步の各氏の協力を得た。採取資料の年代測定と計算は東京大学総合研究博物館放射性炭素年代測定室にお願いした。ここに記してお礼申し上げる。

註

- (註1) Bischof はセチン・パホ遺跡の発掘によりカスマ谷の形成期早期の編年研究が進展したことをふまえ、2011年の著作では「岩絵のように考古学的コンテクストのない作品は、アンデス美術史の資料にはならない」と表明した。また従来は、抽象的な「プンクリ様式」が写実的な「セチン様式」に先立つと論じていたが、両者の編年的区分に見直しを図る必要性を示唆した [Bischof 2011:16-17]。鬼籍に入ったため最終的な見解は示されなかったが、本稿では1994年の著作に従い「フェリーノ」を「セチン様式」の事例として言及する。
- (註2) Z1 基壇で採取した炭化物試料のうち、以下3点は測定結果からして遺構に伴うものではなかったと判断し、論考に含めていない。11MQZ-A-C8 (Beta-321448): 840±30BP、14MQZ-C28 (TKA-19059): 45055±971 BP、14MQZ-X70 (TKA-19059): 473±26 BP。
- (註3) 建築の複雑さを示すために、図5中の遺構名称を用いて、基壇頂上への経路の変遷を略述する。1時期目: U字通路を通る→石1段のZM41を南側に踏み越す (ZM42と階段ZE4はまだない) →石1段のZM62を西側に踏み越す→階段ZE2で床Cへ登る。2時期目: U字通路の突き当たりを東側に踏み越して床Hに登る→階段ZE3にて、高さを増したZM41・ZM62の支える基壇上へと登る→階段ZE5で床Fへ登る。3時期目: 階段ZE8で床Hに登る (U字通路は埋められている) →ZE4で北側から基壇に登る (ZM42の延伸により階段ZE3は埋められている) →床D方面に西進する。
- (註4) 床や壁で隔てられ、建築フェイズの異なる資料どうしには新旧関係を想定したが、Zの③④⑤、Yの①②③は単一の埋土に属するため、新旧関係を設定していない。建築の放棄後に対応する可能性がある11MQZ-A-X8 (Beta-321451) と15MQP-C6 (TKA-19071) は計算に含めていない。Zの③とYの①は異常値としてベイズ推定に使用していない。
- (註5) 神殿群の線的な配置については検討の余地がある。例えばX1→Z5→Z4の線をさらにM区まで延長すると、壁が直線的であるなど神殿建築と共通性のある小基壇、M1基壇に行き当たる (図2)。距離は遠いがX神殿から眺望できる基壇であり、意図された配置かもしれない。なおX1→Y1→P1の延長線上を踏査したが遺構は確認できず、線上に基壇を新造していく活動がP神殿で終了した、と

いう仮説と矛盾しない。

参考文献

Alva, Ignacio

- 2013 *Ventarrón y Collud: origen y auge de la civilización en la costa norte del Perú*. Ministerio de Cultura del Perú/ Proyecto Especial Naylamp Lambayeque.

Alva, Walter

- 1986a *Frihe keramik aus dem Jequetepeque-Tal, Nordperu/ Cerámica temprana en el Valle de Jequetepeque, norte del Perú*. Verlag C.H. Beck, München.
- 1986b *Las Salinas de Chao: asentamiento temprano en el Norte del Perú*. Verlag C.H. Beck, München.

Billman, Brian R.

- 1996 *The evolution of prehistoric political organizations in the Moche Valley, Peru*. Ph. D. Dissertation, University of California, Santa Barbara.

Bischof, Henning

- 1994 Toward the definition of pre-and early Chavin art styles in Peru. *Andean Past* 4:169-228.
- 2008 Context and contents of early Chavin art. In *Chavín: Art, architecture and culture*, edited by William J. Conklin and Jeffrey Quilter, pp. 35-81. Costen Institute of Archaeology Monographs Contributions in Field Research and Current Issues in Archaeological Method and Theory 61, Costen Institute of Archaeology at UCLA, Los Angeles.
- 2011 Los periodos Arcaico Tardío, Arcaico Final y Formativo Temprano en el valle de Casma: evidencias e hipótesis. *Boletín de Arqueología PUCP* 13:9-54.

Bronk Ramsey, Christopher

- 2013 OxCal Program, version 4.2 (<http://c14.arch.ox.ac.uk/oxcal.html>), Radiocarbon Accelerator Unit, University of Oxford.

Burger, Richard. L.

- 1992 *Chavin and the origins of Andean Civilization*. Thames and Hudson, London.

Burger, Richard. L. and Lucy. Salazar Burger

- 1980 Ritual and Religion at Huaricoto. *Archaeology* 33(6):26-32.

Cárdenas Martín, Mercedes

- 1998 Material diagnóstico del Periodo Formativo en los valles de Chao y Santa, costa norte del Perú. *Boletín de Arqueología PUCP* 2: 61-81.

Castillo, Luis Jaime

- 2009 La arqueología del valle de Jequetepeque y la colección Rodríguez Razzetto. In *De Cupisnique a los Incas: el arte del valle de Jequetepeque*, Edited by Castillo, Luis Jaime and Cecilia Pardo, pp.34-61. Asociación Museo de Arte de Lima, Lima.

Dillehay, Tom D. (ed.)

- 2011 *From Foraging to Farming in the Andes: New Perspectives on Food Production and Social Organization*. Cambridge University Press.

- 2017 *Where the Land Meets the Sea. Fourteen Millennia of Human History at Huaca Prieta, Peru*. University of Texas Press.
- Fuchs, Peter R., Renate Patzschke, Germán Yenque and Jesús Briceño
 2011 Del Arcaico Tardío al Formativo temprano: las investigaciones en Sechín Bajo, valle de Casma. *Boletín de Arqueología PUCP*13:55-86.
- Grieder, Terence, Alberto Bueno Mendoza, C. Earle Smith, Jr., and Robert M. Malina
 1988 *La Galgada, Peru: A Pre-ceramic culture in transition*. University of Texas Press, Austin.
- Haas, Jonathan, Winifred Creamer and Alvaro Ruiz
 2004 Dating the Late Archaic occupation of the Norte Chico region in Peru. *Nature* 432:1020-1023.
- Haas, Jonathan and Winifred Creamer
 2006 Crucible of Andean civilization: The Peruvian coast from 3000 to 1800 BC. *Current Anthropology* 47(5):745-775.
- Hogg, Alan G., Quan Hua, Paul G Blackwell, Mu Niu, Caitlin E Buck, Thomas P Guilderson, Timothy J Heaton, Jonathan G Palmer, Paula J Reimer, Ron W Reimer, Christian S M Turney and Susan R H Zimmerman
 2013 SHCal13 Southern Hemisphere Calibration, 0-50,000 Years cal BP. *Radiocarbon* 55(4): 1889-1903.
- 加藤泰建・関雄二編
 1998 『文明の創造力：古代アンデスの神殿と社会』角川書店、東京。
 2011 *Las cronologías del Formativo: 50 años de investigaciones japonesas en perspectiva*. Pontificia Universidad de Católica del Perú, Lima.
- Matsuzawa Tsugio
 1972 Construction. In *Andes 4: Excavations at Kotosh, Peru 1963 and 1966*, edited by S. Izumi and K. Terada, pp. 55-176. University of Tokyo Press, Tokyo.
- Piscitelli, Matthew
 2014 *Ritual is Power? Late Archaic Small-Scale Ceremonial Architecture in the Central Andes*. Ph. D. Dissertation, University of Illinois at Chicago.
- Pimentel, V.
 1986 *Felszeichnungen im mittleren und unteren Jequetepeque-Tal, Nord-Peru: Petroglifos en el Valle Medio y Bajo de Jequetepeque, Norte del Perú*. Verlag CH Beck, München.
- Pozorski, Shelia
 1976 *Prehistoric subsistence patterns and site economics in the Moche valley, Peru*. University of Texas at Austin.
- Pozorski, Shelia and Thomas Pozorski
 1990 Reexamining the critical Pre-ceramic/Ceramic Period transition: New data from coastal Peru. *American Anthropologist* 92(2): 481-491.
- Ravines, Rogger
 1981 *Mapa arqueológico del valle del Jequetepeque*. Instituto Nacional de Cultura/ Proyecto Especial de Irrigación Jequetepeque-Zaña, Lima.
 1982 *Arqueología del valle medio del Jequetepeque*. Proyecto de Rescate Arqueológico Jequetepeque/ Instituto Nacional de Cultura, Lima.
 1985 “Arquitectura monumental temprana del valle del Jequetepeque,” *Historia de Cajamarca I, Arqueología*.

Cajamarca: Instituto Nacional de Cultura/ Corporación de Desarrollo de Cajamarca, 131-146.

Ruiz Rubio, Alvaro, Winifred Creamer and Jonathan Haas

2007 *Investigaciones arqueológicas en los sitios del Arcaico Tardío (3000 a 1800 años a.C.) del valle de Paivilca, Perú*. Instituto Cultural del Norte Chico, Barranca.

坂井正人・徳江佐和子・鶴見英成・芝田幸一郎

2000 「ペルー北海岸における考古学遺跡の一般調査」『山形大学歴史・地理・人類学論集』1: 51-91。

関雄二

2017a 「序章 アンデス文明における権力生成過程の探求」『アンデス形成期の神殿と権力生成』（関雄二編）、pp.1-23、臨川書店。

2017b 「パコバンパ遺跡の埋葬から見た権力生成」『アンデス形成期の神殿と権力生成』（関雄二編）、pp.267-290、臨川書店。

Shady, Ruth

2008 La civilización Caral: Sistema social y manejo del territorio y sus recursos. Su trascendencia en el proceso cultural Andino. *Boletín de Arqueología PUCP* 10: 59-89.

Shady, Ruth, Jonathan Haas and Winifred Creamer

2001 Dating Caral, a Preceramic urban center in the Supe Valley on the central coast of Peru. *Science* 292:723-726.

Shady, Ruth, Marco Machacuay Romero, Daniel Cáceda Guillén, Aldemar Crispín Balta and Edna Quispe Loayza

2009 *Caral, the oldest civilization in the Americas: 15 years unveiling its history*. Proyecto Especial Arqueológico Caral-Supe / Instituto Nacional de Cultura, Lima.

Shady, Ruth and Carlos Leyva (editors)

2003 *La ciudad sagrada del Caral-Supe: Los orígenes de la civilización andina y la formación del estado prístino en el antiguo Perú*. Instituto Nacional de Cultura, Lima.

Shady, Ruth

2014 La Civilización Caral: Paisaje Cultural y Sistema Social. In *El Centro Ceremonial Andino: Nuevas Perspectivas para los Periodos Arcaico y Formativo*. Y. Seki (ed.), pp.51-103.

清水正明・加藤泰建・清水マリナ

2007 「クントゥル・ワシ遺跡より出土したソーダライト製品の原産地同定」『先史アンデス社会の文明形成プロセス』平成 14-18 年度科学研究費補助金[基盤研究(S)]研究成果報告書(研究代表者:加藤泰建)、pp.159-168。

Tellenbach, Michael

1986 *Die Ausgrabungen in der formativzeitlichen Siedlung Montegrando, Jequetepeque-Tal, nord-Peru*. Materialien zur Allgemeinen und Vergleichenden Archäologie Band 39. Verlag C.H.Beck, München.

鶴見英成 (Tsurumi, Eisei)

2008 『ペルー北部、ヘケテペケ川中流域アマカス平原における先史アンデス文明形成期の社会過程』東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻、博士論文(甲)。

2009 「そして9つの神殿が残った:ペルー北部, アマカス複合遺跡の編年研究」『古代アメリカ』12:39-64。

2010 La secuencia cronológica de los centros ceremoniales de la Pampa de Las Hamacas y Tembladera, Valle Medio de Jequetepeque. *Boletín de Arqueología PUCP* 12: 141-169.

- 2010c 「ペルー、アンカシュ県およびラ・リベルタ県踏査概報」『古代アメリカ』13:95-102。
- 2012 「ペルー北部3河谷踏査概報」『古代アメリカ』15:65-74。
- 2014a El estudio de agrupaciones espaciales de centros ceremoniales Formativos: el caso del Complejo Hamacas del valle medio de Jequetepeque. In *El centro ceremonial andino: nuevas perspectivas para los períodos arcaico y Formativo (Senri Ethnological Studies 89)*, edited by Y. Seki, pp. 201-223.
- 2014b 「北部ペルー踏査続報:ワンカイ,ワラダイ,ラクラマルカ谷からの新知見」『古代アメリカ』17:101-117。
- 2017a 「神殿がそこに建つ理由:ヘケペテケ川中流域における社会の変遷」『アンデス形成期の神殿と権力生成』(関雄二編)、pp.355-384、臨川書店。
- 2017b 「古代アンデス狩猟採集民の農耕民化:神殿,交易ネットワークの形成」『狩猟採集民からみた地球環境史:自然・隣人・文明との共生』(池谷和信編)、pp.74-87、東京大学出版会。
- 2017c El Período Formativo en el valle medio de Jequetepeque, norte del Perú. *Nayra Kunan Pacha. Revista de Arqueología Social* 1:175-186.
- Tsurumi, Eisei, Evelyn Anyanett Mora Colonado and Yasutake Kato
- 2005 *Proyecto arqueológico: Las Huacas, valle medio de Jequetepeque, provincia de Contumazá, Depto. de Cajamarca en el 2004*. Instituto Nacional de Cultura.
- Tsurumi, Eisei and Carlos A. Morales Castro
- 2010 *Proyecto arqueológico Tembladera: valle medio de Jequetepeque, provincia de Contumazá, Depto. de Cajamarca en el 2009*. Ministerio de Cultura.
- 2012 Relación entre plataforma y petroglifo del Periodo Formativo en la Pampa de Mosquito, valle medio de Jequetepeque. *Arqueológicas* 29.
- 2015 Un gato con muchas vidas: un petroglifo Arcaico Tardío en el valle medio de Jequetepeque. *Mundo de Antes* 8: 141-157.
- 2016 Excavaciones en la plataforma Z1, Pampa de Mosquito. Primera evidencia del Arcaico Tardío en el valle medio del río Jequetepeque. *Arqueología y Sociedad* 30:353-372.
- 鶴見英成・セサル・サラ
- 2016 「コトシュ遺跡の測量と形成期早期の神殿研究の展望」『古代アメリカ』19:35-46。
- Vega-Centeno, Rafael
- 2005 *Ritual and architecture in a context of emergent complexity: A perspective from Cerro Lampay, a Late Archaic site in the central Andes*. Ph. D. Dissertation, University of Arizona.
- Willey, Gordon R.
- 1953 *Prehistoric settlement patterns in the Viri Valley, Perú*. United States Government Printing Office, Washington.

The Rise of Civic-ceremonial Center in the Andes during the Late Preceramic Period: New Data from the Mosquito Plain

Eisei Tsurumi

(The University of Tokyo)

Carlos Andrés Morales Castro

(Universidad Nacional Mayor de San Marcos)

Keywords: the middle Jequetepeque Valley, the Mosquito Plain, the Late Preceramic Period (the Initial Formative), civic-ceremonial center, agriculture

The objective of this paper is to consider the emergence of first civic-ceremonial center in the Andes, based on the new investigations of the Mosquito Plain, in the middle Jequetepeque valley, northern Peru. We will examine the chronological and functional relationships among monumental buildings in this plain, and discuss on how the centers emerged in this area from an interregional viewpoint.

The previous studies concerning the Late Preceramic Period sites indicate that the situation in the Peruvian north coast is different from the central and north-central coast where the earliest civic-ceremonial centers in the Andes emerged. For example, the number of civic-ceremonial centers known thus far is fewer, and the scale is generally smaller. The authors began the research in the Mosquito Plain in 2009 and discovered the monumental buildings of the Late Preceramic Period in the Jequetepeque valley for the first time.

We intensively excavated the Platform Z1 of the civic-ceremonial center site named Mosquito Z and found the evidence of multiple large-scale architectural renovations at least three times. On the platform, there was a small chamber associated with a possible ceremonial hearth at the corner. Probably, this chamber was placed on the central axis of the monumental constructions. Although this kind of chamber is also known in other Late Preceramic sites in the Andes, architectural traits such as narrow, winding corridors connected to chamber and labyrinth-like layout of the whole platform are unique to this site. According to AMS dating, the date of the Platform Z1 approximately corresponds to 1850-1650 B.C.

To examine the chronological relationship, three other architectural complexes were excavated partially for the purpose of obtaining charcoal samples for AMS dating. Among these complexes, the larger ones of Mosquito X and Mosquito Y emerged before 1900 B.C. while the smaller one, Mosquito P, probably appeared afterwards, around 1750 B.C. All of them were abandoned around 1650 B.C., same as Mosquito Z. Although these dates are still provisional, it is obvious that the emergence of civic-ceremonial centers in this area is approximately 1000 years later than those of central or north-central coast.

Also we considered the functional relationship among these centers. Among the platforms of the four centers, some seem to be laid out on a straight line across the plain. These alignments of platforms indicate the visualized connections among ceremonial centers and are related to religious beliefs shared among them. It seems important to note that these visualized connections probably unified them as a larger social unit that shared religious belief.

In the north coast, Late Preceramic Period centers were scarce probably because these centers emerged later and thus did not co-exist in the region during this period, which is quite different from the cases of central and north-central coast.

The scarcity of centers in the region might have prevented each of them from adopting a shared local architectural style and facilitated to pursue their own styles. For those reasons, the ceremonial centers in the Mosquito Plain seem to show diverse and unique characters. On the other hand, the styles of petroglyphs associated with the centers are strongly related to the contemporary religious art of the north-central coast. In addition, the architectural layout in which a chamber with hearth is placed in the central part of the platform summit is characteristic among the highland sites. It is possible to assume that somewhere between the central coast and the north-central coast, the “first” civic-ceremonial center emerged. However, it is not likely that the ideas and technologies related to ceremonial architecture were imported directly to the neighboring north coast region. A variety of ideas were transmitted to the middle Jequetepeque valley probably through the inter-valley route across the highland presented by Tsurumi.

In the ongoing research, we will focus on the background of the emergence of ceremonial centers in the Mosquito Plain, tying it to the introduction of agriculture in the region.

原稿受領日 2018年9月19日

原稿採択決定日 2018年10月8日